



「何十年、何百年も長持ちするまちづくりを福岡もしていかないかん」

長谷川法世さん



長谷川法世さん
1945年福岡市生まれ。福岡高校卒業後、上京。68年「正午に教会へ」で漫画家デビュー。81年第26回小学館漫画賞受賞の他、博多町人文化勲章も受賞。76年から8年間連載された「博多っ子純情」は全国の若者に支持され、34巻が単行本化された。今年4月「博多町家ふるさと館」2代目館長に就任。



漫画家「博多っ子純情」第四巻/中央公論社より

つかえひつかえ建物を建て替えるでしょ。せめて50年以上、建物を長持ちさせないと。欲をいえば何百年も使える建物を技術の粋を集めてつくって欲しい。ガウティの教会は完成まで200年かかるといわれているけど、そのくらいの長いスパンを考える必要があると思うな。日本人には。昔は同じような家ばかりだったけど、それぞれの家が意匠を凝らしてね。それがそれでまとまっていくんだよ。ヨーロッパのように、時間をかけてまちをつくるっていうのは大切だと思うよ。自分の故郷だからこそ、厳しい見方もしてしまう。でもやっぱり博多が好きだと語る長谷川さん。「故郷って景色だけじゃないからね。人とか空気とか。特に博多は山笠があるから、まちの息づかいが聞こえるけど、人が住む場所だから、昼も夜も24時間、安心して暮らせるまちじゃないとね。博多では今でも、通りを行き交う子どもに声をかける場面をよく見かける。「今日、かあちゃんは何？」とか、「帰るね？」とか。山笠で顔をなじみやけんね。人と人がふれあえるまちづくりが必要じゃないかな。人が住んでいる町は、生き生きしているからね。」長谷川さんはこの日も朝から博多のまちをランニング。走りながら故郷の息づかいを感じとったのだろう。

今年、「博多町家」ふるさと館の館長に就任した漫画家の長谷川法世さん。千葉と博多に事務所を置き、住来している。「博多もすいぶん新しくなったけんね。このふるさと館の周辺とかは、ぼつんぼつんと古いところも残つとうけどね。あと、聖福寺の前の辺りをすーっと浜の方まで歩くと、懐かしい風景に出会えますよ。あの辺は、戦災で焼けたかったしねえ」と、記憶に残る博多のまちを振り返る。博多を舞台にした「博多っ子純情」には、ふんだんに博多のまちが登場する。でも、その頃のまち並みですら姿を消しているという。「福岡はよくと

「博多町家」ふるさと館の前の博多っ子

